

目的 江戸時代の染織類にはどのようなものがあったか、それらの形態や縫製方法はどのようなものであったかをしらべる。

方法 静岡浅間神社に保管されている御神服類のうち、『御神服調書』名では“緋御長袴”8丈と“御襪”4丈・“御枕”4丈の16丈を対象とした実態調査の報告と、他社の遺品類との比較を試みた。

結果 遺品16丈の製作年代は『駿陽歴代記』・『駿國雜誌』によれば寛永18～19年で、徳川家光が神部神社・浅間神社・大歳御祖神社・麓山神社に奉納したものとされている。

緋御長袴8丈の裂地は紅中精好と紅小精好で、御襪4丈はいずれも白文綾。御枕は4丈とも丸型の枕で、中は木、下張りに白紙を貼り表面は白文綾に金糸で龍などの刺繍が施された華やかなものである。

緋御長袴はねじまちの長袴で、紐下丈は131.5～144.3cm、紐丈・紐幅・そのつくり方は他社の遺品類とほぼ同じであるが、腰紐の腰付け以外のくけの部分に、腰糸で10ヶ所以上も結び目がつけられているなど、他社の遺品類にはみられない点などあり、御遷宮のとき奉納される袴のためかとも考えられる。

御襪は、裂地・形態とも他社の遺品類とほぼ似たものである。

御枕は、ほぼ同時代製作とみられる久能山東照宮の御枕は長方型の立方体で、中は木で紙が貼られ更に錦が貼られたものであるなど、形態製作とも異っているので、長袴とともに今後の多くの遺品調査により明らかにしてゆきたい。